

真のグローバル化へ

大手前丸亀高等学校 1年 結城伶菜

日々グローバル化が進む現代。グローバル化によって新しいものが生まれ世の中は多様な社会になってきている。グローバルな時代とも言われるがグローバル化とはどのようなものだろうか。まず初めにグローバル化の意味をきちんと理解しておこう。

グローバル化とはグローバリゼーションとも呼ばれ、政治・経済、文化など、様々な側面において、従来の国家・地域の垣根を超え、地球規模で資本や情報のやり取りが行われることだ。では、なぜグローバル化が起きたのだろうか。主な要因は二つ考えられる。

要因 1. 1991 年のソ連崩壊により社会主義諸国は資本主義へと体制を転換し、市場主義のもとで規制緩和や自由競争が推し進められ、モノ、ヒト、カネが自由に国境を越えて盛んに行き来するようになったこと。

要因 2. インターネットの急速な発展によって情報が国境を越えて共有されるようになり、資金や技術、労働力の移動が地球規模に展開されたこと。

1997 年頃から、民法や会社法等の規定が次々と見直されるようになった。100 年前の国民国家の時代には、一国内における法の整合性を検討すれば済んでいたものが、現在ではそうはいかなくなった。国際的な調和を考慮しなければならなくなったことを意味している。次に、グローバル化がもたらす問題点を取り上げたい。

問題点 人権無視や過酷な労働環境

企業が海外で生産することは、安価な労働力を使い、低コストで生産できることを意味する。日本にとってはメリットのように思われるが、現地の人は安い賃金で長時間労働を強いられている。

世界の縫製工場と言われるバングラデシュには、世界中のアパレル企業から大量に注文が殺到している。理由の一つとして安い労働力が豊富に存在することだ。ジェトロ(日本貿易振興機構)の調査によれば、バングラデシュの製造業における作業員の月額基本給は 86 ドルだ(2013 年度)。バングラデシュの縫製工場で働く人の数は 400 万人に上ると言われ、その内の 8 割が女性だ。それも大半が 10 代から 20 代と、とても若い。縫製工場の経営者たちは、納期の厳しい無理な注文に応えるため、労働者の権利を後回しにして工場を操業する。このため劣悪な労働条件と職場環境は改善されないままだ。バングラデシュの労働法では、最低賃金以下で雇うことの禁止、1 日 8 時間以上の就業禁止、1 週間に 1.5 日の休日設けることなどを定めているが守られていないのが実状だ。

しかし、なぜそのような状況の下でバングラデシュの人たちは縫製工場で働き続けるの

か。それは、「貧しい状況から逃れたい」という強い思いがあるからだ。

近年、バングラデシュは先進国の大企業の介入から著しい経済成長を遂げ、特に 2004 年以降は 2008、2009 年を除いて毎年 6%を持続しており、この数字は日本よりもはるかに高い(図①参照)。また、主要輸出品目の割合を見てもわかるように、それら大企業がバングラデシュの経済を支えていることは否定できない(図②参照)。首都ダッカのような大都市の町並みはこの 10 年あまりの間に高層のショッピングモールが乱立しどんどん華やかになった。しかし、少し路地裏に入ればスラム街が広がっており、バングラデシュの経済成長の恩恵は国民一人一人に届いていないのである。

バングラデシュの一般工の月額賃金は日本のたった 5%なのだ(図③参照)。1 日に 1.25 ドル(購買力平価換算)以下で生活している国民は 43.3%にも上り国民の半分近くが 1 日 150 円(1 ドル=120 円で換算)に満たない額で生活している。この 43.3%という割合は統計が出されている国々の中で最も高い。

貧困がもたらす問題は健康にもあらわれる。アジア開発銀行の統計によれば、2014 年のバングラデシュにおける 5 歳未満の低体重児童の比率は、32.6%である。1990 年には 61.5%で、約 20 年の間に格段に改善しているが、今なお 10 人中 3 人は低体重で生まれてきているのだ。母親の多くが十分な栄養を摂取していないことが原因であるため、このような状況を改善するには、より現金収入を増やすことが必要である。

では、このような状況を打開するためには一体どうすればよいのだろうか。私は、このような時こそ先進国から働きかけていく必要があると考える。

提案として、今売られている主に衣料品の価格を 10 円ほど値上げするのはどうだろうか。その値上げ分をバングラデシュの縫製工場で働く人々の給料や労働環境の改善に使うのである。10 円ぐらいであれば私たち消費者の不満も出にくい。また、値上げ理由なども含め大々的に広告すれば、企業のイメージアップにもつながる可能性があるため、企業も値上げに賛同しやすい。さらに、複数の大企業が取り組みを始めればそれに続いて様々な企業が参加すると思う。この広がり、海洋プラスチック汚染の問題で見られ、一つの地域、一つの大企業がプラスチック製ストロー等を廃止すると公表したところ、それに続いてほかの企業も廃止しようとしているのである。また、値上げに加えて、この商品はどのように、どこで作られたのかという情報が入った QR コードを私たちが必ず目にする値札に付けてみるというのはどうだろうか。これは今のグローバルな社会だからこそ可能である。

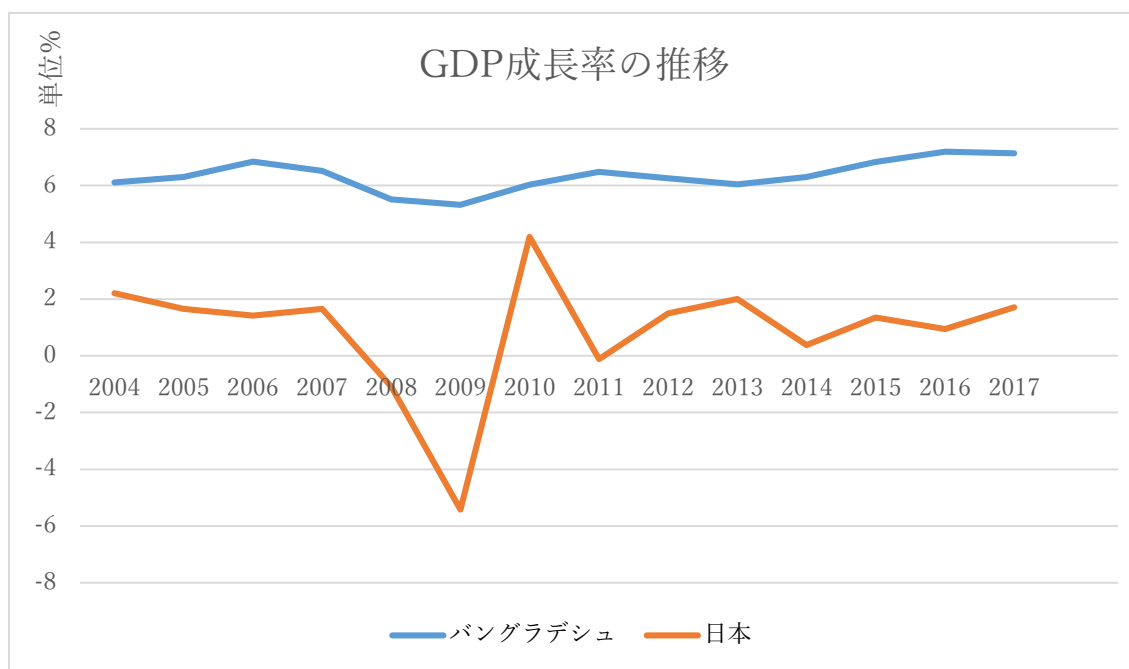
このような取り組みは、先進国から発展途上国への一方的なものであると言われるかもしれない。しかし、この世界規模の問題はバングラデシュのような国々がどうにかして解決できるものなのか。国民には「貧しい状況から逃れたい」という思いがあるにも関わらず、抜け出せていないのはその国々だけでどうにかすることができないからではないか。従って、先進国から働きかけるという方法が一番良いと私には思われる。

私達の身の回りには、安い商品が溢れ、自然とそうした商品を身につけることに慣れきっている。グローバル社会は、良い事のように思われるが、その裏で何が起きているのか

をもっと知らなければならない。そして、その起きている事に私たち自身も深く関わっていることを知る必要がある。まずは洋服のタグを見て、どこの国で作られているのか興味を持って見ることから始めよう。

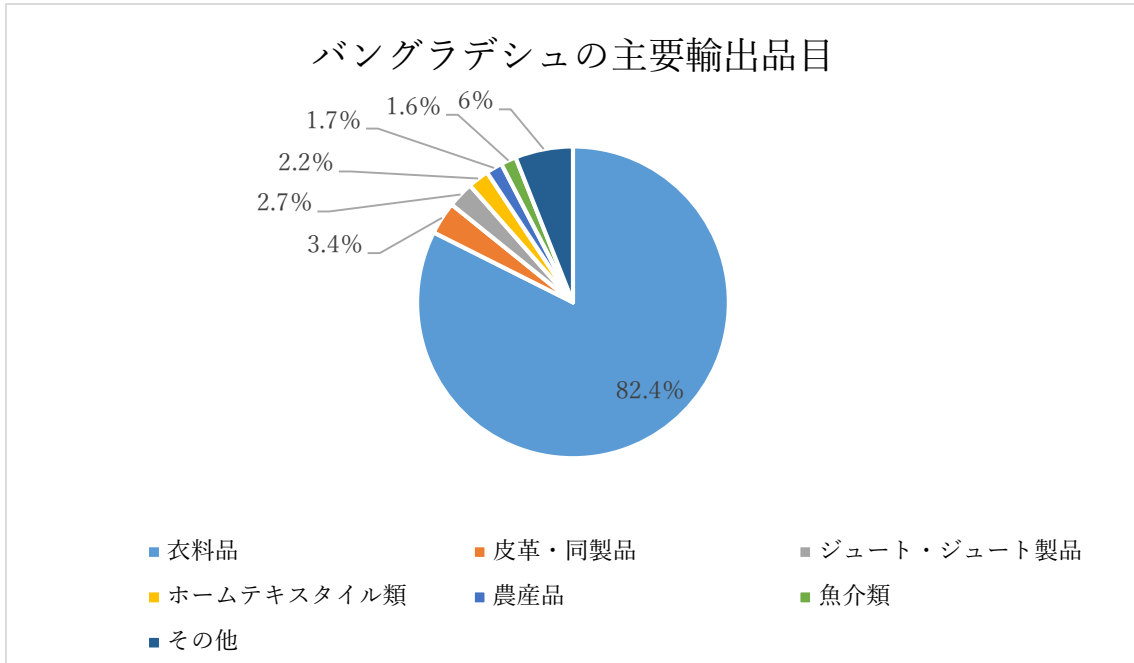
最後に、本論文ではグローバル化による問題点を自国と他国との関係性から述べた。確かに冒頭に述べた様に、グローバル化とは国家・地域の垣根を超える事だ。だが国境を越えることだけではない事を付け加えたい。私達人間の間にも大きな境目がある。例えば男性と女性、若者と高齢者、裕福な人と貧しい人など多くのボーダーがある。相手のことを知り、相手の立場に立って考える。こうしなければボーダーは越えられない。他国、自国関係なく人間の間にあるボーダーを超えるトランス・ボーダー(越境)こそが真のグローバル化であり、これから目指していくべきものではないだろうか。まずは、相手のことを知り、相手の立場に立って考える。このように自分が今出来る事を実行し、少しずつ自分の中の世界を広げていくことが真のグローバル化につながっていくはずだ。

図①



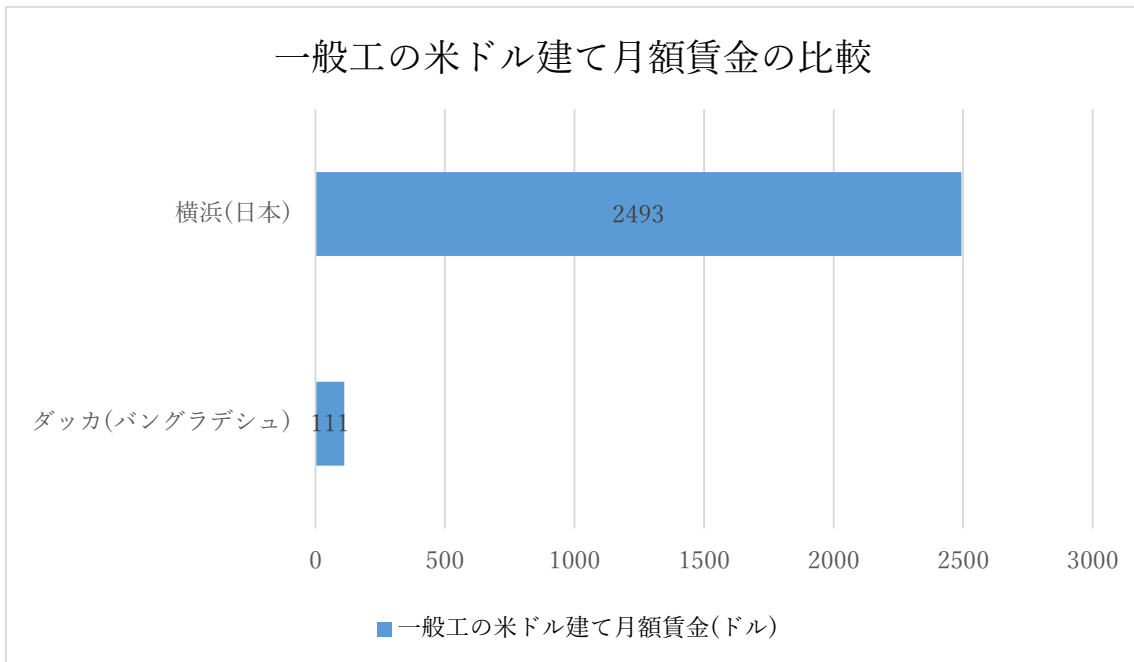
ecodb.net/exec/trans_country.php?type=WEO&d=NGDP_RPCH&c1=BD&c2=JP より

図②



日本貿易振興機構(ジェトロ)世界貿易投資報告より

図③



BTMU Global Business Insight 臨時増刊号 AREA Report 479 アジア・オセアニア各国の賃金比較 (2017年5月) より

■参考文献

出典：宇佐見大司・大島和夫『変わりゆく人と民法』有信堂(2009年)

出典：原田泰・大和総研『新社会人に効く日本経済入門』毎日新聞社(2009年)

出典：NHK高校講座テレビ学習メモ世界史第36回監修・執筆中嶋毅冷戦とその終結
長田華子『990円のジーンズがつくられるのはなぜ?』合同出版(2016年)